

海豊・陸豊地区の文芸運動

秋吉, 久紀夫
近畿大学第二工学部 : 教授

<https://doi.org/10.15017/9831>

出版情報 : 中国文学論集. 1, pp.23-37, 1970-05-25. 九州大学中国文学会
バージョン :
権利関係 :

花山や銀瓶山の麓で、農民の一斉蜂起がはじまったのである。海豊城を攻撃する農民自衛軍と武器を手にした農民は、津波のように県廳・警察署・警備隊を包囲し、三十分の戦いで、すでに広州に去っていた県長張治平を除いた外、すべての対決勢力の主だったひとびとを逮捕した。「海豊は人民の世の中になったのだ。城のうえには、焰のような大きな紅い旗が朝風のなかではためいている。紅いスカートを巻きつけた武装した労働者、農民の兄弟たちは、どの顔も勇敢そのもの、たがいに相手を呼びあひながら、喜びにあふれ、捕虜たちを護送して通りを歩いている。群がる市民たちは、輪になって宣伝員の講演に熱心に聞き入っていた。城壁には布告と「打倒反動派蒋介石！」の大きなポスターが貼られていて、城内はすっかり革命のあたらしい雰囲気が変わっていた。」（星火燎原（上）三五頁）そのころ別の一隊は仙尾を攻撃し、仙尾の警備隊全部を捕え、陸豊では県長李秀藩自らの蜂起呼応によって、戦闘を交えないで占領してしまった。翌五月一日のメーデーには海豊の紅の広場で、にぎやかな慶祝大会が開催され、海豊・陸豊人民政府の成立が宣言された。この海豊・陸豊での農民の武装決起は、一九二七年四月十二日の蒋介石の上海クーデター、四月十五日の広州の反革命成功の報をうけて、海豊・陸豊地区の中国共産党責任者であった鄭志雲・張威・林道文らが指導したものであった。この海豊・陸豊人民政府成立の報せは、広東省東部地区（東江地区）の農民に非常に大きな衝撃を与えた。

しかしそれもつかの間、五月九日には国民党軍閥陳濟棠・李福林・胡謙の軍隊が、東江地区に殺到してきた。海豊は胡謙の

部下劉炳粹師団の攻撃のもとに、大雨の降るなかで烈しい戦いがくり返されたが、占領された。ついで九月十五日夜、海豊・陸豊の農民自衛軍は四隊に分かれ、林道文・彭桂らの指揮のもとに海豊を攻撃、まる一日の戦いで奪還、革命政府を樹立し、地主の所有地を没収し農民に分つ法律を決定した。九月二十五日、またも国民党軍隊によって海豊・陸豊地区は占領された。

このような海豊・陸豊をめぐる彼我の攻守戦がくり返されているころ、海豊・陸豊めざして進んでいた一団の部隊があった。その数一三〇〇余人、傷つき、疲労しはてた身体をひきずるようにして、かれらは、国民党部隊の攻撃線を迂回し小さな山道を辿り、東南方から海豊・陸豊農民自衛軍の監視する激石溪に到着した。この一団は、一九二七年八月一日南昌で決起した朱徳・賀竜・葉挺らの三万の軍の残留兵士たち、二十四師で、師団長董朗・党代表顏昌頤指導の部隊であった。かれらは汕頭を撤退したのち、流沙で会議を開き、周恩来報告にもとずいて、海豊・陸豊地区をめざすこととなった支隊であった。十月七日早朝、林道文の指揮の農民自衛軍の幹部と戦士たちは、南昌決起軍を迎えるために、食糧を準備し、薪をとり、家屋を掃除した。この日空は快晴で、山々には紅旗がはためき、町には銅鑼や太鼓が響き、山も野も附近のひとつとの群で埋まった。午後二時、遙るかラッパの音におくられて、東南の小さな山道から、一本の風にはためく大きな紅旗があらわれ、その背後にながい部隊がつづいて入って来た。爆竹がとどろき、一斉の拍手と太鼓のなりびびく人垣のなかを、戦士たちは雄々しい歩調で、歌をうたいながらやって来た。

われらは暴動おこし

にくいやつらをやつつける

さあ世直しだ

旧いやつらに歯むかい、田畑を分けるのだ

決然と戦って

ソビエトを打ちたてよう

働くものが政治をする

共産制度をつくるのだ

人間みな一つになる

働くものの世界革命を

必ず成功させるのだ。

ところでこの部隊のなかに、海豊出身の農民運動の指導者彭湃がいた。かれは一九二四年一月、国民党第一回全国代表大会決議で創設された農民部の秘書をつとめ、二五年二月の東征（東江地区掃討戦）を経て、北伐に従軍していたのであった。さっそく中共東江委員会はこの部隊を紅軍第二師に編成替えした。

そのころ中共党中央は、全国的に秋収暴動を指令した。東江特別委員会もその指令にもとずいて、十月十日紫金県の南嶺を攻撃した。一方、十月二十一日、海豊の国民党軍陳学順は三〇〇〇の兵力を二手に分け黄羌墟に侵入、自衛軍によって撃退された。その間に公平の農民自衛軍（紅四団第一營）は公平鎮を占領、さらに陸豊を占領した。十月三十日東南路軍（農民軍）は汕尾を占領、遂に十一月一日、陳学順は海豊を放棄した。十一月十八日、かくて海豊・陸豊県城は農民軍の手に帰り、海豊県ソビエト政権が打ちたてられた。彭湃はソビエト政府主席に

選ばれた。その日海豊城は新装され、街路はマルクス路、レーニン路と改名され、紅旗は一斉にひるがえり、労働者・農民は興奮しながら獅子舞をおどり、歌をうたい、銅鑼や太鼓をうちならし、八方から城の西にある紅宮会場におしよせた。海豊・陸豊工農兵代表大会の開催を祝うために。おそらくこの時期に「阿湃回頭来撓雲」の山歌は、ひとびとの口から口に歌われたものと考えられる。ソビエト政府は徹底的な土地改革に着手した。一九二七年時期の東江地区の地租についてみると、当時二種の租税制度が行われており、一種は銀納制で、これは収穫前に金銭で収める制度、二種は穀納制である。地主たちは銀納制よりも、やはり自らの豊かさを誇り顯示しうる穀納制を農民に強いたという。彭湃は、一九二六年の海豊の小作料の額は五〇％ないし七五％であると、その余りのひどさについて記している。この土地改革の実践は、ながい年月虐げられてきた農民たちにとって、天来の福音と受けとられたにちがいない。村々の土壁には赤々と「打倒土豪劣紳、実行土地革命」の標語が大書され、ひとびとのあいだには力強いあたらしい山歌がうたわれはじめた。

太陽が東に出れば

太陽が東に出ればみな真紅
手に紅旗もつは貧乏のため
働くものがひとつになれば
土地革命はきつと成功する。

さあ力を合せて戦うのだ

さあ力を合せて戦うのだ

ぴかぴか光る刀と鉄砲

やつらへ向けてたじろぐな

是が非でもやつと一戦交えるのだ。

白軍へ突込みやっつければ

小作料も借金もみな帳消しだ

土地証文借用品も焼いちまえ

田も畑も山も丘もみな没収だ。

田畑を取り戻してさあ分配だ

男も女も年寄り子供みな同じ

働くものの政府をつくるのだ

政權奪うには手はひとつだけ。

田畑をめいめい分配し終れば

荒れる田畑にさせてはならぬ

くる年くる年刈りとする穀物は

やつらにおさめてなるものか。

食べても喰ってもぎっくざぐ

だれでも理解できるこの事は

土地革命は願ってもない事だ

まだまだあるみんな勝手に物言えること。

その他この時期の歌として「扣仔歌」「彭湃歌」「誰是革命主力量」「打誰人」「石榴開花滿樹紅」「暴動」「放下鋤頭拿起槍」などがあげられる。そしてこれらの歌は、農民のなから自発的に、その地に伝わる山歌のリズムで、歌詞を改作してうたわれたものであった。しかしこの歌唱指導にあたっては、新来の紅第二師の女性戦士曹沢芝・周開辟・周鉄忠らが、意欲的に行っていた。とりわけひとびとが喜んだのは、あの十七・八才の女紅軍だった。その中の背丈のすらりとした曹沢芝、顔に傷跡のある周開辟と小柄でよく肥った周鉄忠は、もう当地の婦人たちと姉妹のようにうちとけあっていた。彼女らはもと武漢中央軍政学校の学生で、性質は明るく活発で、一日中とんだりはねたりしていて、いつも歌を口ずさみ、自分で唱ったり、また人に教えたりしていた。紅軍が到着して以後、中峒(海豊県城の紅の中心地)は毎日ぎやかな戦いの歌声が烈しく波うっていた。(海陸豊的紅旗)

こうしたあわただしさの中に、またたく間に一カ月間がすぎた一九二八年一月一日に、中共党東江特別委員会は、海豊県城の紅宮で、東江農民代表大会を開催することを決定した。中峒の婦人幹部は、さっそく「紅色歌舞団」を結成し、「红色的婦女」「歡迎紅軍」などを編集し、また田家楽などの歌舞をもとり入れて練習していた。「红色的婦女」は、一人の女性隊長が紅旗をもち、十二人の武装した若い女性を率い、次のような歌がはいった劇だった。

わたしたちを女性だといわないで

ただ口紅をつけて白粉塗って身を飾るだけなんて
わたしたちを少女だといわないで

ただ着物をあらい食事の仕度をするだけなんて

ほら見てよこの紅いネッカチーフの美しいことを
ほら見てよこのわたしたちの被っている竹笠を

モーゼル拳銃吊したら

やはり男の子と同じように戦場へ行けるのよ!

戦場へ行つて、やつつける、やつつける!

わたしたちは斧と鎌の旗のもとで

いまや自由の身だ、いまや自由の身だ。

だが国民党軍が侵入するという情報のもとで、この歌舞もと
りやめになってしまった。しかしやって来たのは、一九二七年
十二月十日、広州でコンミュニンの樹立をはかって敗退した葉
挺・張太雷・揮代英らの部隊の一部である徐向前らの属する部
隊で、師長は葉鏞、党代表は王侃如(のち袁紹)だった。この隊
は広州から海豊に赴く途中、花県で部隊改編を行い、紅四師と
命名、士兵ソビエト委員会を選出し、党代表機関(政治部、党
委)を成立させ、三分の二は労働者、農民出身戦士であった。
しかも、すでに隊内で新聞社を所有し、プリント出版「紅軍生
活」と大衆刊行物「造反」を発行していた。女性が三十数人従
軍して、弁公廳(中央機関)の三分の一は女性戦士が占めて
いた。その中には、鄭梅仙や、河南から来た危拱之らが出て、
「紅軍生活」を編集する仕事をしていた。紅四師のなかでは当

時「工農兵聯合歌」が唱われていた。

労働兵同盟のうた

労働兵は一つになって前進だ

みな心はみな同じ

労働兵は一つになって前進だ

さあ立ちあがるのだ

われらは手をとりあい、われらは前進だ

われらは戦う、わが身をかえりみず

あのにくいやつらの本陣へ突込むのだ

最後の勝利はまちがいになくわれら労働兵のものだ。

かれらが海豊県城に近ずいてみた光景について、朝鮮人で広
州コンミュニンに参加した金山は、「数千名もの海陸豊ソビエ
ト民衆が約百里を距てたところから、われわれの歓迎にやつて
来てくれた。われわれはインターナショナルや共青インターナ
ショナルを唱い、一切の労苦を忘れてしまった。」(アリランの歌)
金山は到着すると、党学校で労働運動とコミンテルンの歴史と
活動を教え、宣伝工作を指導し、鄭志雲の下で党組織部の仕事
を受けもった。鄭梅仙らは大衆に舞踏や歌唱を教えた。しかし
事態は一刻も猶予は出来なかった。東江特別委員会はソビエ
ト政権を強化し、東江大暴動を準備するために、大々的に若い
労働者、農民に紅軍への参加を呼びかけた。共産主義青年団員
と婦女解放協会の会員たちは、それぞれ農村に入り、歌をうた
つてよびかけを行った。

勇敢な若者よ前線へ

勇敢な若者よ前線へ行こう

紅軍へ加わるのをためらうな

みんなの幸を守るために

犠牲もおそれず金も要らぬ。

少年先鋒隊員は「童子口号」の歌をうたって訴えかけた。このようにして海豊・陸豊の武装兵力は七万十方に増強された。その内訳は、小銃一万丁・兵器廠一、編成は彭湃のもとに、(1)紅軍第四師二〇〇〇余人、葉鏞のひきいる広州コンミュニンの生き残りとなつた志願兵たち。(2)紅軍第二師八〇〇〇人、数週間前に汕頭攻略を試みて完敗した、賀竜・葉挺の二つの軍隊の生き残りたち、董朗の指揮。(3)工農革命軍、地元から募集された戦士たち。(4)農民赤衛軍、地元の民衆から募集の戦士たちであつた。当時東江地区には「斬到水断才分離」や「羅浮山下東江河」などの農民部隊をたたえた歌が、流伝していた。

ところでこのように強化され、彭湃の「われらが血潮で敵を溺れ死なしてしまえ」のスローガンをかかげた海豊・陸豊ソビエト政府も、ついに群をなして包囲する国民党軍、蔡騰輝・余漢謀らの部隊のために、二月末崩壊した。三月七日、兵力は一万余になり、紅第二師は六〇〇、紅第四師は一〇〇〇人と減り、梅隴・仙尾以外のすべての町と村を失つた。五月三日、生き残つた計三〇〇〇人の勢力(紅二師・紅四師四〇〇〇人、遊撃隊員二〇〇〇人、残りは農民志願兵)は、完全に潰滅し、彭湃は牟田嶺を越え、

上海に脱出、一九二九年秋に中共党中央委員軍事委員会主席となつたが、白雲の裏切りによつて、上海警備司令部で処刑された。この戦いの最中(一九二八年三月) 国民党軍へ向けての宣伝歌謡「告警備隊士兵歌」などが作られ、唱われていた。ソビエト政権潰滅後の海豊・陸豊地区では、その後一九三〇年春、紅四九団が結成され(団長は彭湃の弟の彭桂)、ゲリラ活動を河口墟・捕仔峒・苦竹園・銀瓶の山区で続行していた。かれらのあいだでは、次のような歌がうたわれていた。

建立蘇維埃政權、到今二週年。

工農兵士們、

選代表、執政權、

全國破天荒、政權隨時現。

建設總四月、建設猶美良。

工廠掃農兵、勞動社會建設已造成、

可恨國民黨、破壞我政權、

一九二八年三月后、工農政權從此就失敗！

一切的建設、尽被敵破壞、

工農的痛苦、日更加勵害、

打倒軍閥、堆翻列強、

恢復蘇維埃政權！ (二聯略)

ここでのべている海豊・陸豊の位置については、地図を参照していただくとして、ひるがえつて、それ以前の文芸状況を眺めてみよう。海豊県は人口約四十万・戸数七万余戸、内五万六

千戸が農家で、純自作農が約二〇%、自作兼小作農が約二五%、小作農が約五五%という地域で、「海豊にはたしかに中学・師範・高等小学・国民小学校があるにはあるが、これらは、ただ町の地主や金持の畜人の子どもたちのみに教育の機会を与えるものである。農民はこれに対して、ただ金持の子孫のために教育費を負担するのである。全県の教育費の収入は、その約八〇%が農民から取り立てたものであるが、農民はしかし教育がどんなものかさえ知らないのである。県全体の農民のうち、自分の名前の書けるのは二〇%にもみたく、その他の八〇%は自分の名前すら書くことができない。……村々にはまったく新聞閲覧所・講演団・平民学校の設備がなく、ただ唱歌(昔風の歌劇・芝居)・唱歌(ただ歌曲を歌うもの)および獅子舞などの娯楽機関があるにすぎない。しかし、その戯劇・歌曲の文句は、ほとんど数千年来同じものである。」(彭湃「海豊農民運動報告」) 彭湃は一八九六年十月二十二日、広東省海豊県の大地主の家に生まれ、一九一八年、二二才のとき日本に留学、その年早稲田大学専門部政治経済科入学、一九二一年七月卒業、ただちに郷里にかえった。かえるとすぐに、九月一日創刊の「新海豊」(海豊県学生聯合会機関誌、鄭志雲主編)に「告同胞」を発表した。この雑誌は二号しか発行されなかったが、これによったひとびとには、二名の外に、李国珍・彭沢・馬醒・馬夢暉・陳修・周大林・馬祖作・蔡学賢・蔡家邦・鍾貽謀・周浩・馬国超・馬則慈・梅述・馬煥新などが、論文・詩・小説・隨筆などを掲載している。論文には馬国超の「兩個工人底議論——無政府共產主義」や馬醒の克魯泡特金(クローバトキン)の「告工人」の紹介、彭沢の「寡

婦解放」などがあげられる。この雑誌の発刊のことはである。「新海豊発刊詞一」には、「新海豊は旧海豊に対して云うのである。新海豊の意義は、海豊の新しいさを用いてあり、それは今日から開始されるのである。時間的にいえば、宇宙の事物は、すべて進化の法則の支配をうけないものはない、すなわち宇宙の事物は一日たりとも古いものから新しいものへ変化しないものはない、そのように、海豊もむろんこの事物の日に日に新たになるという原理から述べることはできない。しかしかなる事物を問わず、みな形式と精神の二面性をもっている。一つの事物は、その形式が、新しいといっても、もし精神が依然として古ければ、新しいとは云えない。まして海豊では形式の新しいものさえまだおかれていて、これではどうして新しいといえようか。海豊の精神面での新しさはここ数年来はじまったのである。それ故、今日海豊は、はじめて新海豊と呼べるのである。空間的にみれば、現在世界の新しい潮流は流れ込んでいる。しかしここ数年間の海豊は、いくらかの新しい文化をそそぎ入れたけれども、表面的にはどんな反応もあらわれなかった。それ故われわれは、自ら新しいんだと叫んでみたけれども、ひとびとは納得しようとしなかった。だがいまはちがう。種々の組織と文化運動の動きがいたるところで台頭しているからだ。われわれのこの雑誌も、新しい運動と組織の一つの表現に入られるはず。このように、今日海豊は、本当に新海豊である。」(「新海豊」第一号) かれら海豊の学生及び知識人たちは、五四文学運動の波にのって、前途の旧海豊に戦いを挑んだのであつ

た。彭湃の「告同胞」も、法律・政府・国家を否定し、私有財産制度の破壊を緊急の問題と認め、社会革命の実行を宣言している。「諸君ノ志あるものは事必ず成るものだ。われわれは現在社会のあらゆる罪悪、あらゆる欠陥を認めるからには、社会革命を實行せざるを得ない決意を有している。われわれはただちに覚悟すべきである。たがいに研究し、たがいに団結し、たがいに連絡し、たがいに扶助し合うことを。思うに社会とは、社会人の社会である、社会革命——社会運動とは、社会人にあわせて運動するもので、革命とはこのことをいうのである。個人あるいは少数のもので成就できるものではない。もしそれで成就したならば、それは必ず真の社会運動、社会革命ではないものである。」と。しかしかれはこのように社会革命の必要を語っているが、またその実行の具体的方法には触れていなかった。当時の彭湃の思想には、アナキズムの傾向が強く、かれは早大在学中に、日本でのアナキズムの組織である、淺沼稻次郎・三宅正一らの「建設者同盟」に加入していた。この雑誌によつたひとびとにも、その前述の論文などのように濃厚なものがあつた。彭湃は、そのため、教育を通じて社会革命を實現しようと考えていた。たまたま、海豊出身の軍閥陳炯明が、福建省漳州を根拠地にして、一九一九年十二月一日に「閩星」といふ半周刊の雑誌を創刊し、一九二〇年一月一日にはさらに「閩星日刊」を發行しはじめた。陳は辛亥革命時期に、秘密結社三合会を利用して、地盤を築いた男で、当時漳州でつぎつぎと開明政策を實行し、公園や図書館を開設し、道路を築造し、街路の模様まで整えていた。ひとびとは、漳州を「閩南的俄羅斯」(福建南部のソビエト)と呼ん

でいた。陳の出していた「閩星」雑誌もアナキズムでおおわられていた。その編集者両極(梁泳丞)らはさかんにクロパトキンの相互扶助論をたたえ、国家の消滅を主張していた。これは陳炯明のかいた「閩星發刊詞(五四時期期刊介紹第三集)」にも明らかである。この時点では、表面的にせよ、思想的には同一傾向を示していた海豊の絶対権力者陳炯明が、海豊の大地主の息子で日本留学帰りの秀才、彭湃を見のがす理由はない。かれは彭湃を海豊県の教育局長に迎えたのである。彭湃は二十五才であつた。教育を通じて社会革命の夢が達成できると思つていたかれにとつても、願うところであつたにちがいない。当時一九二一年四月、陳炯明は孫文の指令で広西省を平定し、この結果十一月には広東省長並びに広東軍總司令となり、孫文に迎えられて広東に帰つた。しかし陳炯明は、やがて孫文に背叛したため前職を同時に解かれ、陸軍總長にまつりあげられた。孫文は広東軍を直轄におき、北伐軍を江西に入れ、李烈鈞の手で韶州を占領させた。ここにおいて陳は公然と反旗を翻し、六月十六日大部隊を移動させはじめた。八月十三日、孫文は広東をのがれ上海にかくれた。この孫文の上海滞在は、かれをしてレーニンの「中国におけるデモクラシイと国民革命運動」に心酔せしめ、のちの国共合作への道を開かせるものとなるのである。こうみえてくると、一九二二年四月から六月までの陳の動向が、彭湃にも影響を与えてくるのが歴然である。一九二二年五月一日(これについては中国の文献は殆んど一九二一年と記している。彭湃自身も

しかし前述の背景からと、また日本よりの帰国と考えあわせて、一九二二年の方が正確と考える。その点では山本秀夫説をとる)に、海豊県城に

全県の男女学生とおおぜいの金持の子女を召集して「メーデー」の労働祭を挙行した。かれはその折に、次のような歌を自分で作り、学生たちに歌わせたのである。

メーデーのうた

きようは何の日だ

メーデーの日だ

世界の労働者同盟がストライキをおこした日だ

働くことはとっても大事

社会革命はもうすぐだ

どうかみなさん

“働く”という字を忘れないで。

これがもとでかれの海豊県教育局長の職は免ぜられたのである。かれはただちに李春涛と「赤心週刊」を出して、陳炯明の海豊での新聞「陸安(炯明の号)日報」と論戦を展開していたが、やがていままでの自己の運動の欠陥を自覚し、農民運動にとび込むことを決意した。ここにかれによって拓かれた以後の中国革命の道程、農民運動が登場するのである。そして同時に文芸運動も前とは異った方法をとりはじめたのである。

かれは農民運動をはじめするために、赤山約の村に白い学生服を着、白の帽子をかぶって出かけていった。だが結果は「零」に等しかった。「この晩、私は思いがけなく二つの重要なことから気づいた。一つは、私が農民にはなす言葉、づかいがあら

りに上品すぎることである。つまり、われわれのいうことで農民にははつきりわからないことが多いので、私は書物に出てくる多くの術語を俗語に翻訳することにした。二つは私の容貌や身なりが農民と同じでないこと、つまり、農民は容貌や身なりの同じでないものから、圧迫と欺瞞を受けるのに慣れているので、私を見て自分たちの敵ではないかと疑うのである。……明日実行する一つの新しい計画を思いついた。というのは、明日村へ行かないで、もっぱら農民のもっとも多く往来する十字路を選んで、そこで宣伝することにきめたのである。翌日私は竜山廟の前の広い通りに出かけた。」(彭群「海豊農民運動報告」かれは農民の苦悩の原因、および地主の農民に対する虐待・圧迫の事実と、どのようにして農民を解放し救済すべきかについて、説明した。かれは問答方式で講演し、蓄音機を持って行って歌を聞かせ、手品をみせては農民をひきつける方法をも考えついた。このようなかれの努力によって、一九二二年九月、五〇〇人の会員をもつ赤山約農会の成立大会が開かれた。当時から海豊県城の附近の農民たちのあいだに「田仔罵田公」の歌をつくりひろめさせた。

地主をやっつけろ

どん／どん／どん！

小作は地主をやっつけろ！

地主に野垂れ死にや解らない

小作はひとつに団結しろ

こころを合せて世なおし起すんだ
世なおしおこして田畑を分けるんだ!

一九二三年一月一日、海豊県総農会の成立大会が開かれた。会員十萬、戸數二萬、海豊全県人口の四分の一が農会に加入したのである。彭湃は會長となり、副會長に楊其珊が就任した。農会の對農民へのよびかけとして、(1)減租(小作料の軽減)、(2)「

三下蓋(地主が農民から小作米をとるとき、短い木の丸棒で挿入れたモミのうえを三回押しつけるように往復して、できるだけモミの量を沢山にすること)の取消し、(3)「伏頭鶏」「伏頭鴨(地主や番頭が小作米をとりにくると、飯の供應のほか、鶏や鴨を提供させる慣習)の取消し、(4)「伏頭錢米」(伏頭鶏といっしょにいくらかの現金を包む慣習)の取消し、(5)警察にわいろを与えないことを決定した。しかし減租の実行だけは五年の間を置いて実行する予定だった。農会には教育部と宣伝部が組織された。宣伝工作には、中学生・高等小學生・知識人があてられ、宣伝方法は、(1)定期講演——各村によって時期をきめ、宣伝部から人を派遣して宣伝させる。(2)輪回宣伝——宣伝員が各村を輪番に廻って宣伝する。(3)農会から各村の会員に通知し、もしも各村で迎神(除夕の「灶神」祭・賽会(祭・共進会)・演戲などの催しものがあるときには、三

日前に農会に報告させ、報告にしたがって農会から人を派遣して宣伝させる、などと明確にされた。また教育部は、農民学校を開設することを当面の工作に課した。一九二三年の旧の一月十六日、農会は「海豊全県農民新年同樂会」を催した。会場は橋東の林氏租廟前の広場で、来会した会員は六〇〇〇余人、非

会員の参加者は三〇〇〇余人にのぼった。開会の順序は、(1)小奏楽、(2)主席の開会理由宣布、(3)演説、(4)歌曲、(5)獅子舞、(6)農民万才、(7)爆竹で、演説したのは彭湃・黃鳳麟・楊其珊であった。この日各村から繰りだした旗幟や鼓楽はきわめて多く、獅子舞や曲班(一種の音楽団)もすべて参加した。さらに農民組織の高まりによって、地主と農民との階級対立は激しくなるとともに、農会は勢よく拡大を遂げた。一九二三年の旧四月には、農会は紫金・五華・惠陽・陸豊・潮州・普寧・惠来などの東江地区の各県にも分設され、ここに海豊を中心とする広東省農会が発足した。執行委員会が組織され、教育部(部長馬煥新)・宣伝部(部長林甦)・交際部(胡漢南など)・農業部(李芳工など)・調査部(部長萬維新)・文書部(部長余創之)・仲裁部(部長余創之)・財政部(部長楊其珊)・衛生部(呂楚雄)・庶務部(部長林朝宗)という編成がなつた。その中でも宣伝部は部員に彭湃・李芳工・林務農・黃正当を含め三十余人という、もっとも規模の大きなものであつた。このことはいかに宣伝分野をかれらが重要視していたかがうかがえるものである。とくに詩歌運動は、農民に農会加入を理解させるための有力な方法として大いに展開された。彭湃自身、農村婦人向けにいろいろな山歌を作って宣伝員に流伝させた。次のはその一つである。

山歌うたえばにぎやかなもの
朝に食べたは一杯の薯の粥
腹が空ききべこべこだけど

さあ草葺き小屋を建てるのだ。

百姓たちはあわれなものよ
夕に食べるも一杯の暑の粥
草小屋かけたけど梁がない
つきのひかりはあめと降る。

一九二四年一月レーニンの死んだときは、レーニンを悼む「海陸豊革命歌謡」が作詞され、農民たちのあいだでうたわれた。しかしこの海豊県を中心とした農民協会も、遂に一九二四年三月十七日、陳炯明の弾圧の前に解散を表面的には余儀なくされてしまったのである。だがこの海豊に源を發した流れは、一九二四年一月の国民党第一回全国大会（広州）での農民部開設によって、全国的な飛躍を遂げるに至った。この国民党一全大会は、同時に国共合作という性格をも持っていたために、農民部は部長林祖涵をはじめ阮嘯仙・譚植棠・陳公博など当時の容共派・中共系が歿んどをしめていた。なかでも実権は、組織幹事の彭湃の手に掌握されていたという。むろん彭湃は中共黨員であった。彭湃が海豊で実践した組織形態は、そのまま名称は変更されたとしても採用されている。例えば農民学校は広州農民運動講習所（第一回一九二四年七月三日から八月二十一日、彭湃第一回主任、卒業生三十三人、第一回から第三回までは殆んどが広東省内の農村出身者である）、農民自衛軍の組織、特派員制度（宣傳員）などがそれである。さらに一九二六年一月には中国国民党中央執行委員会農民部編集の「中国農民」が刊行され、第一期から三・四・五期にわたって、かれの「海豊農民運動報告」が掲載され、

同時に「中国農民」第一期には、のちに「中国社会各階級の分析」と改められた毛沢東の「中国農民中各階級の分析及其对于革命的態度」が掲載された。ここに農民運動、そして農民に立脚した文芸運動は当面の革命運動の課題として全国的規模をもつにいたったのである。彭湃は一九二六年七月、北伐軍の北上ともなつて従軍した。

以上、海豊・陸豊の文芸運動を、それと不離の関係にある農民運動との関係において眺めたわけであるが、つぎにそのような文芸運動をささえた理論ともいふべきものを考えてみたい。海豊・陸豊の文芸運動は、彭湃を除いては考えることができないのは、前述のとおりである。彭湃がどのようにしてその独自の文芸運動を確立したかについては、すでにのべたのでここではあまり触れないが、ただかれが一九二二年五月一日のメーデー事件のことについて、「実に幼稚きわまるものといわざるをえない」（一九二六年「海豊農民運動報告」）と後年述懐していることは、当時の自らの皮相な思想を批判する思想が形成されていることをあきらかに物語っている。かれは農民運動という実践活動の場で、文芸運動の在り方を積みあげたことはまちがいない事実である。一九二四年七月の第一回農民運動講習所の主任をしながら、学生たちに「農民運動之理論及其実施方略」や「關於実習宣伝訓練（1）統計学、（2）問答報与造論、（3）演説与集会実習、（4）弁論会（5）唱歌（6）図画」、そして長洲陸軍軍官学校（黄埔）で十日間の軍事訓練を施し、日曜・休日ごとに農民運動見習を行った。第二回（羅綺園主任）から第六回（毛沢東主任）まで通して、農民運動状況並びに理論を講義した。かれは前述の論文の「海豊農民

の文化状態」の項で次のように農民の文化について把握していた。農民の思想は、半分は父から子、子から孫というように伝わってきたもの、半分は戯曲の歌詞によって影響されたものであって、そこに一つのきわめて強固な人生観を作りあげたのである。彼らは反抗をもって罪惡となし、従順をもって美德とする。旧教育(満清時代の八股先生のような)が、分に安んじて己れを守り、地主に従順で、皇帝を尊崇するようにと教えることは、農民のもっとも歓迎するところであり、新教育や運命・風水陰陽家の説く墳墓の相等に反抗することは、すべての農民のきらいところである。そのほか菩薩・鬼神等の説は、好んで農民の信仰するものであって、これらはいずれも庄迫階級が農民を世々代々その奴隷にしようとして賜った奴隷の文化である。しかししてこの農民を奴隷に陥し入れる歌詞を、農民を主人とする歌詞に改作し、農民の好む曲をただちに古いときめつけないで、積極的に活用したところにかれ彭湃の文芸理論の根柢があると考へる。それは一九三〇年代の上海での文学の大衆化運動のなかで革新陣営が、歌詞も曲も旧い否定すべきものと民歌民謡を拒否した姿勢とは異なる現実的な土台に立つものであった。この彭湃の理論は、毛沢東の文芸理論とも共通する次元のものである。

ところで、一九二七年の大革命期に、海豊・陸豊の指導者で林道文をあげていたが、かれについて少し説明しておこう。この林道文は海豊の学生出身で、一九二五年一月一日から四月一日まで開講した、第三回農民運動講習所(阮嘯仙主任)の卒業生である。第三回は入学生一二八人で、その内訳は、鄉村学生二十九人・労働者四人・小商人一人・軍人二人・自作農二〇人・

小作農七十二人であった。海豊からは六人が入学し、林道文(二十二才学生)・陳文(二十二才学生)・陳醒光(二十才学生)・何丹成(二十才労働者)などであった。このため、彭湃が広州に去ったあとの海豊・陸豊地区の中共党組織及び農民自衛軍指揮を、彭桂(彭湃の弟)らと背負った林道文の文芸運動も、前者彭湃の理論と実践と異なるところはないと考えられる。

なお海豊・陸豊には、一九二七年十月と一九二八年一月の二度にわたって、外部から大量の戦士が移って来た。かれらは到着すると、文芸宣伝活動を積極的におしすすめ、とくにどちらの場合も女性戦士がそれらの活動の主力であったとのべた。南昌組の女性たちは、すべて武漢中央軍政学校の学生だった。広州組の女性たちについては正確にはわからないが、ただ危拱之については判明している。彼女は一九〇七年河南に生まれ、はじめ馮玉祥軍の国民党軍の宣伝部に所属していたが、一九二七年、馮玉祥が南京側に妥協したため、漢口に出て中共黨員となり、一九二七年十二月の広州コンミュニオンに参加し、海陸豊コンミュニオンに辿りついたのである。彼女はのちに、パリ・モスクワに芸術文学研究のために留学し、帰国後江西ソビエト区で活躍、一九三七年には、延安の「人民抗日劇社」の責任者となった。ここで問題なのは、彼女たち自身ではなくて、彼女たちの属していた部隊である。広州コンミュニオンの部隊も、もとはといえば南昌暴動の中共黨員賀竜・葉挺、それに南昌軍官学校長兼公安局長の朱徳らが指揮にあたった約三万の部隊の残留勢力と武装労働者の部隊であった。南昌組はもちろんのことである。南昌暴動以前の一九二六年十月に朱徳軍内では南昌に軍

官教育団を設立し、校外活動を展開させ、臨時宣伝隊八十人を編成していた。また北伐にはなばなしの戦果をあげたこれらの部隊国民革命軍は、孫文の命によってソビエトに留学していた蒋介石の帰国をまって、一九二四年五月に開校した広州の黄埔軍官学校の卒業生が中核となって構成されていた。黄埔軍官学校では「比較的純情な青年に、軍事教育は二の次ぎにし革命教育を注入し、一種の革命狂信者をつくり上げ、卒業後はこれを軍官として各隊に配属させ、或いは宣伝員として各省に潜入させ、特に出来のいいものは政治部に任じて各隊のコミッサルとし、革命狂信者の網を全革命軍に張ったことが、北伐成功の重要な原因である。……政治委員は各隊の幹部と略々同数で、軍隊と行動を共にする外、兵卒の教育もやり、宣伝もやる……この（コミッサル）組織の樹立に際しては、最高顧問ボロディン・軍事顧問ガアレンが心血を注いだところである。」（波多野乾一「中国共産党史」第一巻）といわれているように、かれらは実に献身的な努力を革命のために惜しまなかった若者たちであった。この革命の花ともいわれた黄埔軍官学校が成立され、政治教官として招かれたのが、中共黨員張秋人・蕭楚女・高語罕、そしてその主任政治教官が当時上海で共産主義青年団の中央宣伝部長をし、「中国青年」の編集長をしていた惲代英であった。副主任は葉劍英であった。惲代英・蕭楚女は、彭湃・毛沢東と共に広州農民運動講習所の教授をも兼ねていた。当時の講義内容は、ベトナム人で一九二五年広州黄埔軍官学校内に開設されたベトナム革命戦士訓練所に入學していた、レ・マン・チンが、かれらの訓練所の講義を語っていることから、大体察せられる。

「まず初期資本主義から帝国主義への移行期における人間の発展の歴史を学んだ。しかし私には、トラスト・シンジケート等の単語をそれだけで理解することはきわめて困難であった。ついで外国の支配下にある朝鮮・中国・インド、そしてベトナムにおける民族解放運動の歴史を勉強した。さらにガンジー主義や孫文主義のようなさまざまな理論を批判的に学んだ。十月革命の経緯をマルクス・レーニン主義と平行して学ぶこともできた。われわれはまた国際救護協会、国際婦人・青年・農民連合、国際赤十字の三つの国際組織の歴史を学んだ。また宣伝と組織化の方法論も習った。最後にわれわれは、いかに宣伝活動を行なうべきか、またいかにして、青年・学生・農民・労働者の各組織の情報・宣伝網につかせるかを学んだ。特別クラスがこの実習のためにとつてあった。」（ベトナム外文書院編「ホー・チ・ミン人とその時代」。ところで惲代英についてであるが、かれは一八九五年湖北省に生まれ、中共党当初の一人である。かれは北伐開始と同時に宣伝委員会に属して北上、南昌暴動に加わり、広州コミュニティンを張太雷・葉劍英らとともに指導し、失敗後香港から上海にゆき、一九二八年秋、中共党中央宣伝部秘書長、一九三〇年春逮捕、一九三一年四月二十九日処刑された。このような経緯を眺めてみると、海豊・陸豊に到着した二個部隊の戦士たちのなかには、惲代英から文芸宣伝運動に関して指導を受けたひとびとがいたと考えられないことはない。まして一九二七年以前の文芸運動理論家として、鄧仲夏とともに「中国青年」誌上に論文を掲載していたからには、惲代英は一九二三年十二月八日に「八股」を、一九二四年五月に「文芸与革命」を

発表している。次に黄埔軍官学校が開校された五月に発表した「文芸与革命」の一節をあげてみよう。「わたしは文学とは何か解らないが、文学とは、人類の気高く純潔な感情の産物」だと信じています。このようにいってはみませんもの、もちろんまづ革命的な感情を所有してこそ、はじめて革命文学というものをもつことが可能だと考えます。現在の若いひとびとで幾人が革命的な感情といえるものを所有しているでしょうか。一般の人は頭の中にただ、金のこと、虚栄のこと、そして恋愛のことをつめておいて、かれらはたまたま、幾つかの「奮闘」とか「革命」とかいう文字を書き、鸚鵡のように口まねしているだけで、なか身はなんの考えも含めていなくて、かれらは革命的な文学を書き得たと思っているのでしょうか。もしかれらが書いたそれらの作品がまったく気高くて純潔な感情の産み出し、いわゆる革命的な文学でなければ、それは文学といえるでしょうか。わたしは信じています。もっとも大事なことは、まず一般の若いひとびとが自分の足で実地を踏む革命家になるように努めることです。これらの革命家の中で幾人かの感情豊かな若者たちが、自然に革命的な文学を書くことができるものです。」

〔「中国青年」第三十一期〕

この渾代英の文学論は素朴なものであるが、当時であって、やがて勃興する文学を明確に予測するものであった。一九二八年以前の海豊・陸豊の文芸運動は、このような理論を支えとして展開されていたと考えられるのである。

以上海豊・陸豊の文芸運動をながめたが、そこにはやはり最初に指摘したとおりに、農民運動（革命運動）と密着した関係で、

文芸運動が発展を遂げていた。そしてそれらはまた、ただ自然発生的な状態ではなく、意識的に近代を経過したひとびとによって指導されていたのであった。

註

この文を執筆するために使用した資料の細部について列挙するには非常に多くのスペースが必要なので、参照資料のみ次にあげる。

- 1 「中国現代文学史参考資料」北京师范大学中文系編 高等教育出版社 一九五九年三月刊
- 2 「中国農民」第一期、第七期 中国国民党中央執行委員会農民部 中華民國十五年一月より七月刊
- 3 「第一次国内革命戦争时期的農民運動」人民出版社 一九五三年十月刊
- 4 「中国共産党史」第一卷 波多野乾一編 時事通信社出版局 昭和三十六年六月十五日刊
- 5 「星火燎原」(出) 中国人民解放三〇年徵文編輯委員会編 人民出版社 一九五八年刊
- 6 「民間文学」一九五六年六月号 編輯者中国民間文学研究会民間文学編輯委員会 人民文学出版社刊
- 7 「民間文学」一九五六年十月号 編輯者中国民間文学研究会民間文学編輯委員会 人民文学出版社刊
- 8 「嚮導」第一期、第二期、第一期 編輯者嚮導週報社 總發行所嚮導週報社(上海) 一九二二年九月十三日より一九二七年七月十八日(漢口)
- 9 「中国共産党史稿」第一編 王健民著 中華民國五十四年十月正中書局
- 10 「中国近代農業史資料」第二輯 章有義編 生活・読書・新知三聯書

店 一九五七年十二月刊

- 11 「五四時期期刊介紹」第三集 中共中央馬克思恩格斯列寧斯大林著作編譯局研究室編著 人民出版社 一九五九年十二月刊
- 12 「中國歌謠資料」第二集上・下冊 北京大學中文系暨秋白文學會編 作家出版社 一九五九年刊
- 13 「人民中國」一九五九年七月号 編纂者人民中國編集委員會 外文出版社刊
- 14 「中國現代文學選集」5 (郭沫若・郁達夫集) 平凡社 昭和三十七年十二月五日刊
- 15 「アリランの歌」ニム・ウエルズ著 安藤次郎訳 みすず書房 昭和四〇年九月三日〇刊 原著 Song of Ariran a life story of a Korean Rebel by Kim San and Nym Wales. Publisher: The John Day Company, New York 1941.
- 16 「ホー・チー・ミン人とその時代」ベトナム外文書院編 原大三郎・太田勝洪共訳 東邦出版社 昭和四一年四月三〇日刊 原著 Days with Ho chi minh; Foreign Languages Publishing House, Hanoi 1962. President Ho chi minh; Foreign Language Publishing House, Hanoi.
- 17 「近代中國農民革命の源流」彭湃著 山本秀夫訳 アジア經濟研究所 一九六九年一月十日刊
- 18 「中國文芸座談会ノート」№16——活報——樋口進 九大中國文學研究會編 昭和四十二年二月一日刊
- 19 「江西蘇区での詩歌運動關係資料——近代中國文學を理解するための試論その四」秋吉久紀夫著 中國文學評論社 一九六八年十月一日刊